

## 5 家族キャリア

以下では、結婚経験・親なり・親との死別といったライフイベントの経験状況を明らかにする。NFRJ03 データから知ることができるライフイベント経験は限られている。また、多くは経験年齢を尋ねていないため、個人のライフヒストリーを再構成することができない。そのため、NFRJ98 データと同じ視点・同じ分析手法で比較をすることは不可能である。

なおライフイベント経験の分布は、年齢とコーホート双方からの影響を受ける。NFRJ データから両者の効果を識別することは難しい。ここではコーホートを主要な軸としつつ、データを読み取ることにしたい。

### 5-1 結婚

最初に結婚経験率と有配偶率についてみておこう(表 5-1)。ここでいう結婚は事実婚を含んだものである。前回調査の同コーホートの既婚率と比較をすると、1966-70 年コーホートでこの5年間に男性で 18.6 ポイント、女性で 22.2 ポイントの上昇が認められる。NFRJ98 における既婚率を、今回の調査と比較をすると、同年齢時における既婚率には大きな違いはない。若干相違があるのは、1966-70 年コーホートの女性は NFRJ98 調査において 65%であったのに対して、今回調査の 1971-75 年コーホート(前回調査と同年齢層に該当)における既婚率は 71%となっており、6 ポイントの増加が認められることである。むしろ、これをもって既婚率の晩婚化に歯止めがかかっていると判断することはできまい。本調査の基本属性に、配偶状態と関連した歪みが生じている可能性も指摘できよう。

有配偶率と既婚率との差は、若年層では離婚、高年齢層では死別によるものが大半を占めている。離婚・死別経験率については後述する。

表 5-1 年齢・コーホート別既婚率と有配偶率

	男性			女性			NFRJ98 既婚率	
	N	既婚率	有配偶率	N	既婚率	有配偶率	男性	女性
1971-75 年	286	55.6	52.8	339	71.1	67.6	—	—
1966-70	269	76.2	72.9	354	87.6	82.2	57.6	65.4
1961-65	286	85.7	81.5	385	94.5	85.2	76.8	87.7
1956-60	275	92.7	88.0	330	95.8	87.6	86.2	94.3
1951-55	325	91.1	85.2	363	97.0	87.1	87.0	95.1
1946-50	390	94.4	87.7	408	97.5	88.0	94.5	97.4
1941-45	345	97.4	91.0	402	96.3	77.4	95.8	97.4
1936-40	334	99.1	90.4	298	97.3	78.2	99.4	96.3
1931-35	312	98.7	89.7	270	97.4	66.3	99.1	97.4
1926-30	143	99.3	88.1	186	98.4	60.2	98.4	97.9

NFRJ03 データでは初婚年齢を特定することはできない。苦肉の策ではあるが、配偶者との結婚年齢の四分位から結婚年齢とその時代による変動をとらえた（表 5-2）。ここでは、離死別による無配偶者は、集計の対象から除外されている。分布からは、やはり晩婚化の趨勢が読み取れよう。1970 年代前半コーホートでは男性の中央値が 31 歳、女性では 27 歳であった。75 パーセントに注目すると、1960 年代コーホートの男性は 35 歳、女性では 30 歳に達している。また四分位範囲（QR）が拡大する傾向にあることにも注目すべきであろう。ここから結婚年齢が多様化する傾向が読み取れる。男性の四分位範囲の若年コーホートにおける拡大は、75 パーセントの上昇に伴っている。ただし、これは高齢で結婚をしたものほど、配偶者との死別を経験しやすい傾向があるためかもしれない。

表 5-2 配偶者との結婚年齢

	男性					女性				
	N	Q1	Q2	Q3	QR	N	Q1	Q2	Q3	QR
1971-75 年	278	26.0	31.0	—	—	327	25.0	27.0	—	—
1966-70	260	26.0	30.0	—	—	335	24.0	27.0	30.0	6.0
1961-65	274	26.0	29.0	35.0	9.0	349	24.0	26.0	30.0	6.0
1956-60	262	26.0	29.0	33.0	7.0	303	24.0	25.0	29.0	5.0
1951-55	306	26.0	29.0	34.0	8.0	328	23.0	25.0	27.0	4.0
1946-50	364	25.0	28.0	32.0	7.0	369	23.0	24.0	27.0	4.0
1941-45	323	25.0	27.0	30.0	5.0	326	23.0	24.0	26.0	3.0
1936-40	306	25.0	27.0	29.0	4.0	241	22.0	24.0	26.0	4.0
1931-35	284	25.0	27.0	30.0	5.0	186	23.0	25.0	27.0	4.0
1926-30	127	25.0	27.0	29.0	4.0	115	20.5	24.0	26.0	5.5

配偶者の基本属性について、ここで学歴および出生年についてとらえておく。本人と配偶者の学歴に、強い関連が認められることはいうまでもない(表 5-3)。

表 5-3 本人と配偶者との学歴

		【配偶者】						
【本人】	N	中学	高校	専門学校	短大・高専	大学	大学院	
男	中学	439	59.7	35.8	2.1	2.1	0.5	—
	高校	987	11.3	67.9	7.6	11.4	1.7	—
	専門学校	158	7.6	41.8	22.8	23.4	4.4	—
	短大・高専	122	6.6	42.6	9.8	33.6	7.4	—
	大学	676	1.8	34.8	6.2	34.3	22.2	0.7
性	大学院	42	—	2.4	2.4	26.2	59.5	9.5
女	中学	394	69.3	24.1	1.5	2.8	2.3	—
	高校	1171	12.0	58.8	4.6	6.0	17.6	1.0
	専門学校	315	3.2	41.0	14.9	10.2	27.9	2.9
	短大・高専	463	2.2	26.3	5.0	14.0	49.5	3.0
	大学	238	0.4	6.3	4.6	1.7	75.6	11.3
性	大学院	6	—	—	—	—	50.0	50.0

注：旧制学校を最終学歴とする者は新制の該当する学歴カテゴリに読み替えている。

若年調査票（1956-75 年出生）のみを対象に将来の結婚についての意向を尋ねている。調査時点での意識に焦点をあてた項目であり、既婚者は非該当として扱われる項目のため、ここでは年齢を重要な軸と考え、年齢別の集計結果を示した（表 5-4）。「あまりしたくない」・「絶対にしたくない」とする否定派は、全体からみれば少数である。ただしその分布には男女による差が認められる。男性には年齢の分布と意思に大きな相違は認められないが、女性では、30 代以降の年齢層で結婚を望まない者の比率が、年齢とともに増えていく傾向がみられる。

表 5-4 結婚の意向 (％)

		N	絶対したい	なるべく したい	どちらとも いえない	あまり したくない	絶対に したくない
男性	28-29 歳	54	16.7	48.1	33.3	1.9	0.0
	30-34	90	18.9	44.4	31.1	3.3	2.2
	35-39	68	13.2	36.8	44.1	5.9	0.0
	40-44	36	11.1	47.2	33.3	8.3	0.0
	45-49	21	4.8	33.3	38.1	19.0	4.8
女性	28-29	49	22.4	42.9	28.6	6.1	0.0
	30-34	83	10.8	41.0	32.5	12.0	3.6
	35-39	43	7.0	20.9	53.5	16.3	2.3
	40-44	56	0.0	14.3	57.1	17.9	10.7
	45-49	22	0.0	4.5	50.0	40.9	4.5

## 5-2 親なり

NFRJ03 データから知りうるのは、健在の子どものみである。最初に子をもった経験とその年齢を明らかにすることは正確にはできない。図 5-1, 5-2 に、健在子の分布を示した。なお集計の対象には未婚者も含まれている。

男女ともに 1966-70 年コーホートでは、男性に 3 人に 1 人、女性で 5 人に 1 人が子を持っていない。死亡している子を含めて尋ねた NFRJ98 データとの比較は厳密にはできないが、1961-65 年コーホートで男性における親なり未経験率は 34%、1966-70 年コーホートで 59% であった。同年齢時における親なり経験率には、大きな違いはなさそうである。

また同年齢における女性の親なり未経験率は NFRJ98 では 19%、1966-70 年コーホートで 48% であった。調査時に同年齢層にあたる 1971-75 年コーホートでの NFRJ03 における健在子を持たない女性の比率は 40% である。2 つの調査時点間で同年齢における親なり経験率が 8 ポイント高まっていることになる。ただし、既婚率において言及しているように、この差が調査設計の違いから生じるバイアスや、質問形式の違いによってもたらされた結果である可能性も強い。

健在子のうちもっとも出生年が早い子が生まれたときの本人の年齢を四分位で比較したものが表 5-5 である。死亡した子については NFRJ03 データで尋ねていないため、「親なり」のイベントの経験年を正確に割り出すことはできない。高齢者層において、子の死を経験する確率は無視しえない大きさであろう（しかも年長の子どもほど死亡する確率が高いと考えられる）。このことから生じるバイアスに注意をしなければならない。

こうした制約はあるものの、やはり親なり経験年齢は上昇する傾向にあることが如実に示されている。男性では1960年代後半コーホートで、女性では50年代後半コーホート以降、大幅に親なりが遅くなる傾向があらわれている。ここでも四分位範囲の拡大が認められ、親なりタイミングが多様化する傾向が指摘できる。

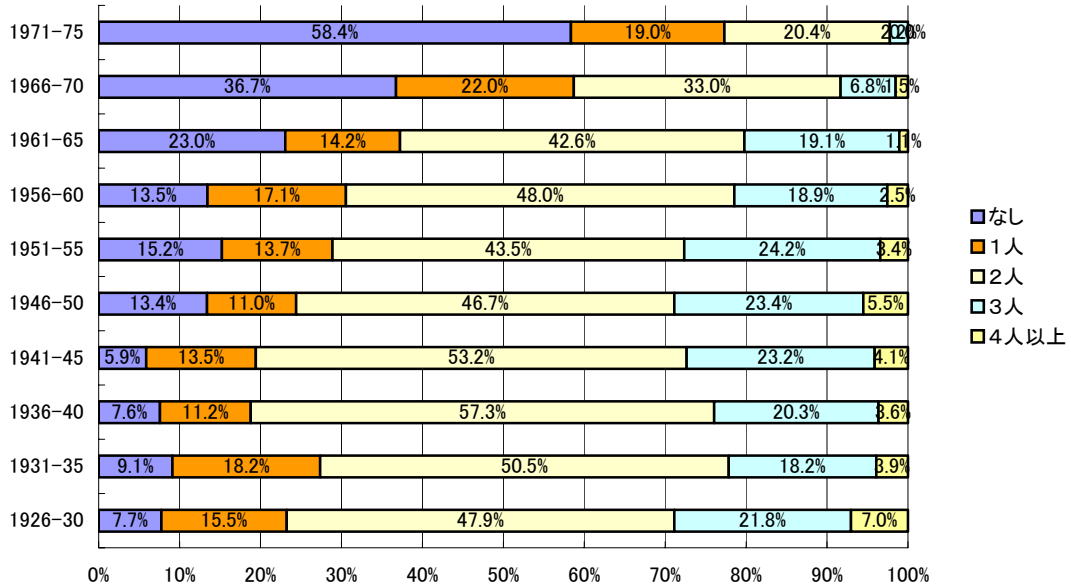


図 5-1 健在子の有無と人数（男性）

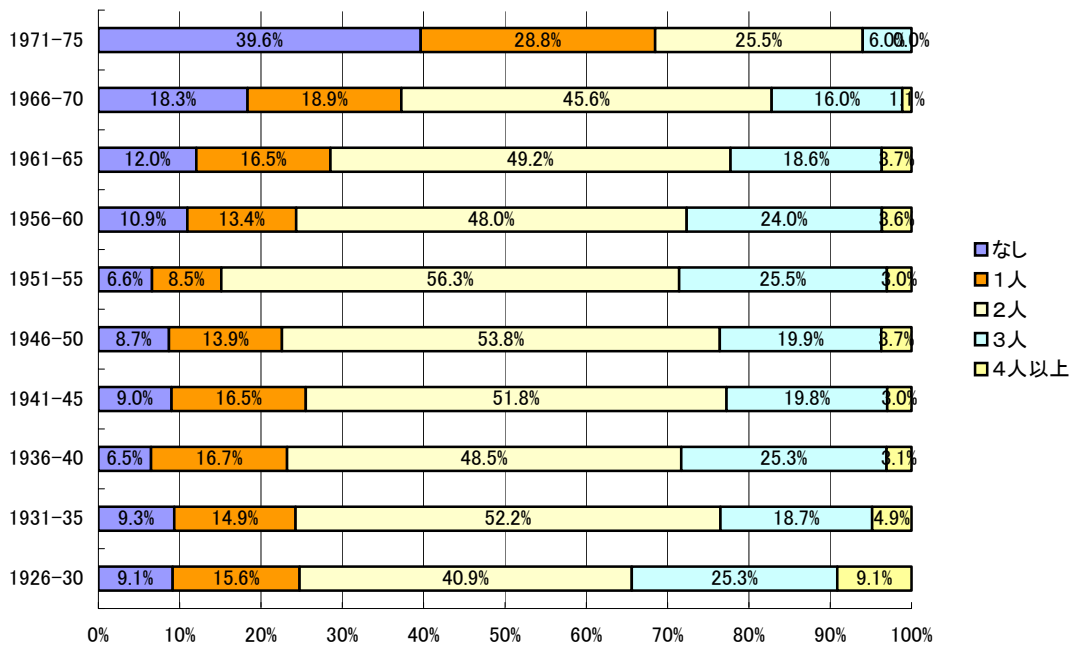


図 5-2 健在子の有無と人数（女性）

表 5-5 健在子 1 人目の出生時の年齢

	男性					女性				
	N	Q1	Q2	Q3	QR	N	Q1	Q2	Q3	QR
1971-75 年	623	28.0	—	—	—	285	26.0	29.0	—	—
1966-70	621	29.0	33.0	—	—	269	25.5	28.0	33.0	7.5
1961-65	667	28.0	31.0	40.0	12.0	285	26.0	28.0	32.0	6.0
1956-60	604	28.0	30.0	36.0	8.0	274	25.0	27.0	31.0	6.0
1951-55	686	27.0	31.0	36.5	9.5	323	24.0	26.0	29.0	5.0
1946-50	794	27.0	30.0	35.0	8.0	387	24.0	26.0	29.0	5.0
1941-45	745	27.0	29.0	32.0	5.0	343	24.0	26.0	28.0	4.0
1936-40	632	27.0	29.0	32.0	5.0	334	24.0	26.0	29.0	5.0
1931-35	575	27.0	30.0	33.0	6.0	308	24.0	26.0	29.0	5.0
1926-30	322	26.0	29.0	33.0	7.0	142	22.0	25.0	28.0	6.0

### 5-3 初めての子の結婚

子どものライフイベントについては、結婚経験の有無を尋ねている。これをもとに、健在子をもつ者を対象として、子どもの結婚経験率を算出した（図 5-3）。ここでは健在子のうちいずれか 1 人でも結婚している者を、経験済みとして扱っている。65 歳以上の年齢層で 80% に達するものの、より高齢の層でも数値は変わらない。晩婚化に伴う現象のひとつとして理解できよう。

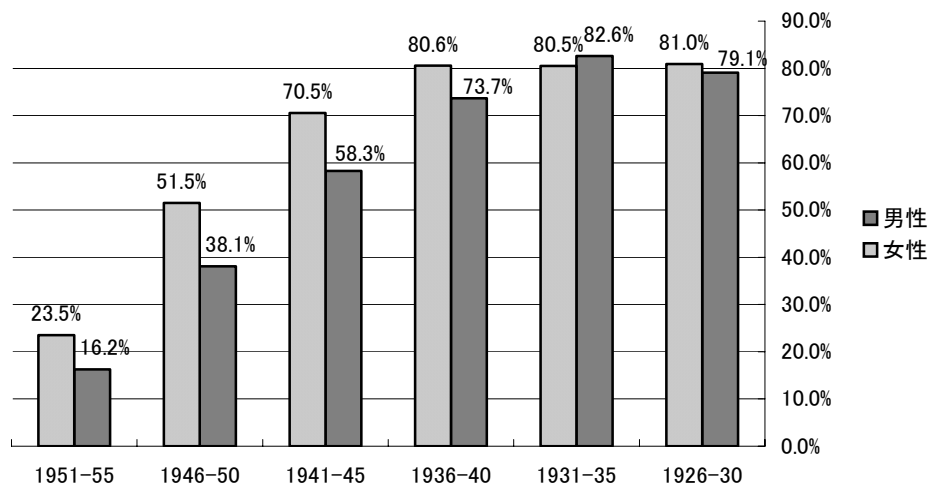


図 5-3 最初の子の結婚経験率

### 5-4 親との死別

親との死別経験の分布を確認したい。父母の健在・死亡について尋ねた項目をもとに、「父母ともに健在」「母のみ健在」「父のみ健在」「父母ともに死亡」の割合をコーホート別にみたものが図 5-4 である。50 代前半から 60 代前半にかけて、「父母ともに死亡」の割合が、5 歳ごとに 2 割上昇していくことがみてとれる。父母いずれかの死を経験する年齢は 40 代に多いといえそうだ。もっとも、横断データの性質上、ここに示された年齢カテゴリ

ーは異なるコーホートに属している。両者の効果を同一視することはできない。

「母のみ健在」と「父のみ健在」の割合にはいずれの年齢層でも大きな差があり、父親の死を先に経験しているものが圧倒的多数である。

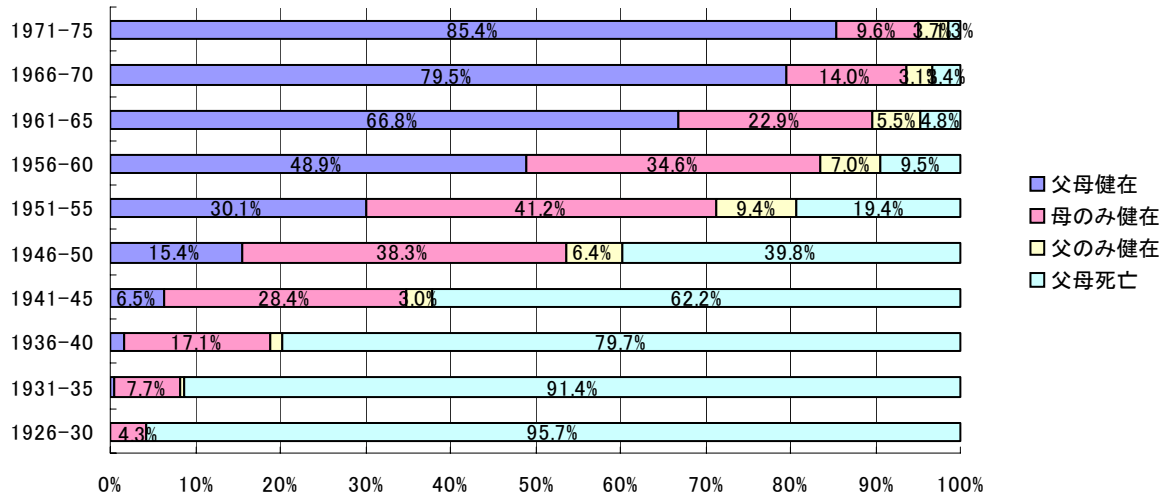


図 5-4 親との死別経験率

### 5-5 配偶者との離別・死別

NFRJ03 データでは現在の配偶状態を「現在配偶者がいる」「いない（死別した）」「いない（離別した）」「いない（結婚したことはない）」の4カテゴリーで尋ねている。さらに有配偶の者には、離婚・再婚の経験を尋ね、離死別経験による再婚を特定することができるようにしている。これをもとに、配偶者との離死別経験率を算出した。有効な集計の対象は、既婚者で上記の2つの問いに有効な回答をしている者に限られる。

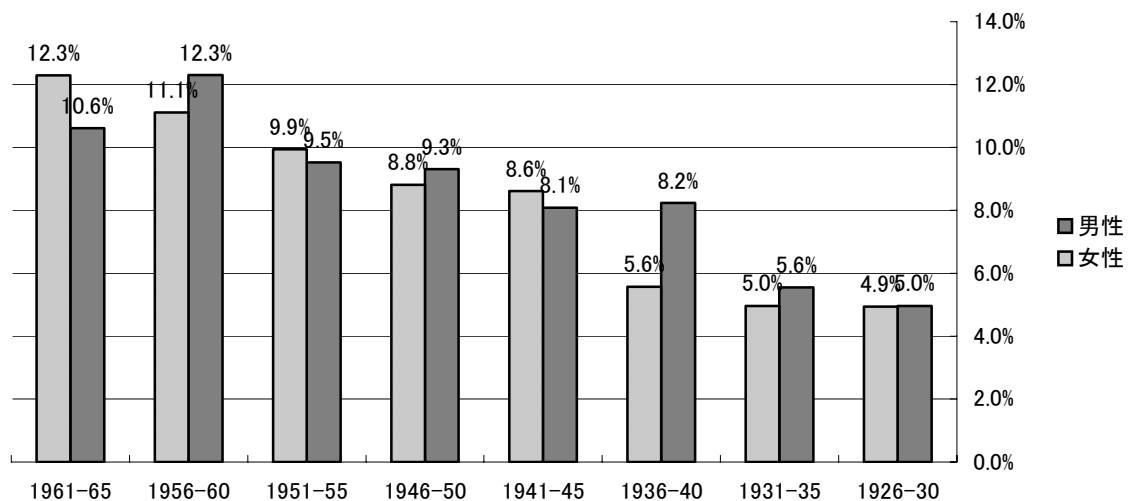


図 5-5 離婚経験率

まず離婚の経験率は、1956年以降のコーホートで高く、1956-60年のコーホートにおい

て男性で12%、女性で11%に及ぶ(図5-5)。結婚からの経過年数が相対的に短い、1961-65年コーホートの離婚経験率もすでに前のコーホートの離婚率に並ぶ水準であることに注目すべきであろう。

さらに、図5-6に既婚者における死別経験率を示した。図には、経験率が上昇しはじめる、50歳以上の年齢層のみについて結果を示している。男性で配偶者の死を経験するものは少なく、もっとも高齢の年齢層でも1割程度にとどまる。一方、女性では、その割合は格段に高くなり70代では4割ちかくにまで達している。

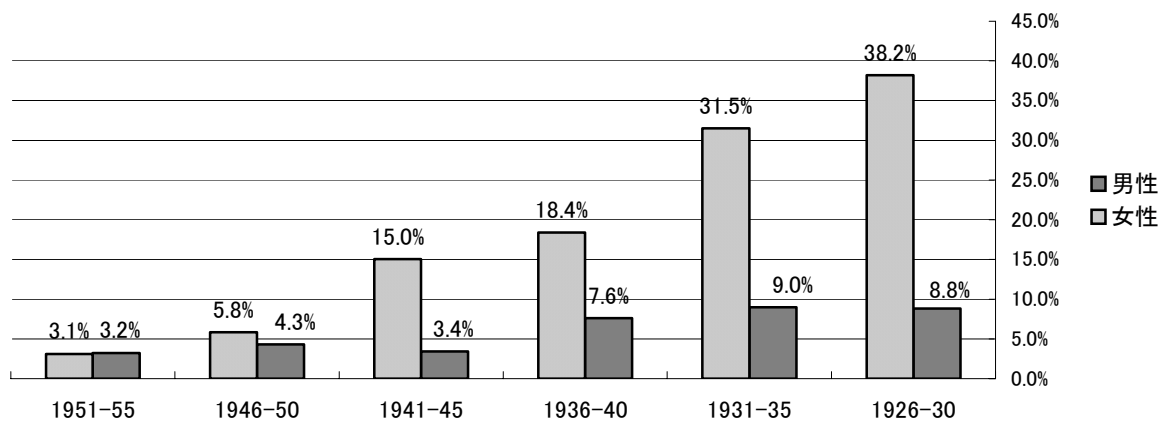


図 5-6 死別経験率

## 5-6 小括

本章では、結婚・親なり・子の結婚・親との死別・離死別による結婚の終焉に焦点をあてて、NFRJ03 から知りうる現代日本のライフイベント経験を記述した。NFRJ03 と NFRJ98 の両調査における、調査票の設計上のもっとも大きな違いはライフイベントの調査項目にある。

NFRJ03 ではここに集計結果を示した、ごく基本的な項目のみを尋ねたにすぎない。それは5年という短期間のあいだにライフイベントの経験率や経験年齢に大きな違いが生じることはないであろうという予測にもとづく判断であった。たしかに、結婚と親なりに関しては、その予測どおり経験率に両時点間に相違は認められない。

また本章では、未婚の子を持つ高齢者が多数存在していること、親の死が実に広範な年齢にわたっていること、若年コーホートにおける離婚率が高いことを指摘した。